

## 『十六画漢惡縁起』影印と解題

佐藤 悟

### 【解題】

『十六画漢惡縁起』（書名は尾題による。以下『惡縁起』と略す）は惡摺とよばれるものの一つである。惡摺は他人の秘事を暴いて一枚摺や冊子にして秘かに配布したもので、文久三年に仮名垣魯文が千住小塚原の妓楼大黒屋抱えのお信を後妻にするまでの経緯を梅素玄魚・山々亭有人・落合芳幾らが「白石くどき」という戯文にしたのを契機とし、それ以後戯作者や遊民の間で惡摺の応酬が続ぎ、慶応三年にはその評判記『鳴久者評判記』が刊行されるにいたるといふ、一種の社会現象にまでなった。

『惡縁起』に登場する十六人の画漢は興画合の作者である。興画合は波月亭花雪を中心とした幕末の遊芸で、その最初の作品集『興画帖』が刊行されたのが元治元年であるから、文久年間以降の江戸で流行した遊芸である。その主要な同人を十六羅漢に見立てたのがこの『惡縁起』なのである。

『惡縁起』が紹介されたのは無声山人「惡摺考」（『此花』第十六枝、明治四十四年七月）が惡摺の実例として「第三洒落癡

選者」の画像を示し解説をおこなったのが最初と思われる。その後『書物往来』愚文珍文号（大正十三年十月）にその本文と草稿本（笹野文庫蔵）の「第一破那阿迦選者」の部分（参考図1）が掲載され、広く知られるようになった。同誌によれば島田筑波がその解題を依頼されていたが間に合わなかったという。ところが慶応大学所蔵本には大正十三年九月一日付けの島田筑波の識語があり、それによると島田筑波は天鈞居主人の委嘱を受けて調査を行い尾寅亭（興画合の同人であった魚河岸尾張屋主人）の談話により、それぞれの人物の比定を行っている。これも予定されていた解題のための作業の一環であったのであろう。さらに黙阿弥全集第十卷（春陽堂、大正十四年）の口絵には落合芳幾が描いた十六画漢像の中の黙阿弥像（参考図2）と『惡縁起』の第十六新羅婆袈選者（黙阿弥）の部分が掲載された。両者の比較により『惡縁起』が十六画漢像をそのまま写していることから、十六画漢像そのものが一種の惡摺であり、『惡縁起』はその縁起であったことが看取される。

『惡縁起』の内容そのものについては、『十六画漢惡縁起』解題（『書物往来』第二年三号、大正十四年八月）に青山繁の投書が掲載され、さらに彫柴内浅五郎『十六画漢惡縁起』物語（『書物往来』第三年五号、大正十五年六月、以下「物語」と略す）によって十六画漢の正体とその刊行の経緯が知られるようになった。その内容は尾寅亭の談話とも一致し、信頼できるものと思われる。

この『惡縁起』が執筆されたのは前にも触れた落合芳幾画の十六画漢像制作を契機としている。その芳幾の描いた十六画漢像は興画合の作者達とも縁が深かった柴田是真が入手した東福寺蔵李龍眠筆十六羅漢像に基づいていた。是真が羅漢像を二百五十両で入手したのは安政二年であったが、その借金を返済することができたのは九年後の文久三年であった。しかしその間の万延元年八月九日に小石川伝通院境内大黒堂で羅漢講式を行い、広く世間に知られるようになった（『蔭絵師塗師両工伝』国書刊行会、大正十三年）。『惡縁起』に描かれた黙阿弥の画像は狂言作者として市村座・守田座・中村座の三

座兼勤をしたことを示している（「物語」とされるので、これが正しければ慶応元年正月以降の制作ということになる（八丁裏注参照）。また黙阿弥は明治元年八月に市村座を退座しているので、この『悪縁起』の成立はそれ以前ということになる。芳幾に十六画漢像の制作を指示したのは慶応元年六月五日に早世した波月亭花雪かその周辺の人物であろう。また羅漢像の性格から花雪追善のために制作された可能性も考慮しなければならないだろう。

それでは、その縁起にあたる『悪縁起』は何時刊行されたのであろうか。慶応元年十月に刊行された悪摺の評判記『鳴久者評判記』には『悪縁起』についての記述が無いので、その刊行時期はそれ以降と思われる。作者は仮名垣魯文、画工は落合芳幾であった。無声山人「悪摺考」によれば、この作品は発兌の当時、古書店頭に吊され、発見した興画合の同人が買い求めて、数日で売り切れたという。作者の詮索が行われたが、死後その草稿本が出るまでは魯文の作であることが発覚しなかったという。

または真所蔵の十六羅漢図は不明である。建仁寺蔵十六羅漢図はもと東福寺にあり、フリア美術館所蔵の十六羅漢図も東福寺の塔頭であった三聖寺の所蔵とされ、いずれも李龍眠様式の十六羅漢像であるが、画像の比較から両者とも是真所蔵のものとは異なることが明らかである。

# 【書誌】

所蔵 佐藤 悟

体裁 半紙本一冊。表紙とも十丁。縦二三、一糎、横一六、〇糎。

外題 十六画漢之模写縮像 並ニ悪縁起

尾題 十六画漢悪縁起

作者 (仮名垣魯文)

画工 (落合芳幾)

蔵書印 「古堀栄文庫」

【翻刻・注釈】

凡例

慶応三年に刊行された波月亭花雪の三回忌の追善集『くまなき影』は興画合の同人の略伝を影の肖像を掲載し、跋文を魯文が記していることから、略伝も魯文、もしくは序文を記した山々亭有人の手になるものと考えてよいと思われる。これと惡縁起の文章を対比することにより、惡縁起の文意を理解することが可能になろう。そのほか『粹興奇人伝』や『三題楽話作者評判記』、橋本素行『恩』（明治三十三年刊）などの資料を参考に、尾寅亭や浅五郎の推定の確認をおこなった。李龍眠様式十六羅漢像の比定には高崎富士彦『羅漢図』（『日本の美術』二三四、至文堂、一九八五年刊）、赤沢英二『日本中世絵画の新資料とその研究』（中央公論美術出版、一九九五年）を用いた。

『惡縁起』に掲載された画漢の配列は李龍眠様式羅漢図の順番とは異なる。その配列はおそらく役者評判記を意識し、興画合における各人の力関係を反映しているのであろう。

不明の点もまだ多く、人物、その他についても御示教を願いたい。

〔表紙〕

興画山案景寺什宝



戲遊民筆

十六画漢之模写縮像 完

並ニ惡縁起

〔一丁表〕

第一破那阿迦選者

破那阿迦選者は南閩舞台第一座狂言堂中に在て、役者如來等の來迎を待、正本經を説給ふに、聽衆の諸物御經の役不足をの給ふときは、たちまち感釈明王の形相を現じ、雲に駕して馬道の精舎に飛去給ふとなり。選者御鼻赤きのみならず、都て赤きを好みたまひ、御使しめのわらはを阿迦雄童子とよべり。其性丹念にましくて、いさゝかなる興文を綴り給ふにも、梵字数万を譜し給ふ。故に上根浄書筆頭第一物と崇め奉れり。

破那阿迦選者は浅草馬道に住んでいた狂言作者三代目瀬川如皐のことである。明治十四年六月二十八日没、七十六歳。「与話情浮名横櫛」や「東山桜莊子」などの作で知られる。その性格について『歌舞伎新報』第百六十号（明治十四年七月十七日）の追悼記事も次のように記す。

常に作意の本体頗ぶる綿密にして、所謂かゆい所へ手の届くが如く、加はふるに少しのした絵（劇場道具帳則ち飾り物の下絵又表看板番付絵本なぞの下書を云）とて、簡略の図画を書ず、みな極彩色にして、その密なること却て絵師を凌ぐ

ことまゝあり。実に其根氣の剛なるは驚ろくべし。(ルビを省略し、句読点を補った)

三題断にも参加し、その画像と略伝と作品を集めた『粹興奇人伝』には巻頭に据えられている。『くまなき影』には次のような略伝を載せる(ふりがなは省略し、句読点を補った。以下同じ)。

馬道の狂言堂と称せるは、深川に狂言堂あればなり。初号藤本吉兵衛、今改て三世の芳名、其鼻赤をもて、中興作者の鼻祖と自称す。筆を採て倦事なく、脚色微細にして、丹念人目を勞せり。故孫太郎南北、曾て此人を懷刀として、代案の筆をとらせ、添削して正本を全うせりとぞ。去ばこそ当時戯場作者三大家の一個と称せられる。

如皐は鼻が赤かったことから破那阿迦選者と名付けられたのである。そればかりか赤いものも好きで、『赤ひもの尽し画合』(都立中央図書館蔵)の序文には赤好舎如皐と署名している。

画像は李龍眠様式の第二迦諾迦跋蹉尊者に倣う。手に払子を持つ代わりに、唐辛子を持つ。「物語」には如皐が唐辛子が好きだったことを記す。

## 〔一丁裏〕

### 第二須菩計羅選者

須菩計羅選者は常に高点軸三役山の内を出給はず、興画の功名かくやくたる神通自在の惡羅漢なり。選者御形容肥満にして、外面善童子の如く見へ給へども、内心世才にたけ、小利剣を研て種々無量の御細工をなし給ひ、又指をもつて鼻を穿ち、数多の糞玉をまろめ出し、或は楊柳の枝をそぎて口中を探り、自らその嗅氣をかいで平常の快樂とし給ふ事、普く衆生の知る処なり。

須菩提羅選者は山々亭有人をいう。明治三十五年一月二十四日没、七十一歳。その伝については土谷桃子「桑野伝平（山々亭有人・採菊散人）年譜考証」（お茶の水女子大学『国文』七十七号、平成四年）が備わる。東京日日新聞創始者の一人とされ、東京大学法学部明治大正新聞雑誌文庫が所蔵する東京日日新聞を発行した日報社の株主名簿によれば、明治十二年には株式会社となった時には、五百株中五十株を所有している。『くまなき影』には次のような略伝を載せる。

近頃浅草中代地に新居す。桑野氏にして、俗称伝兵衛と云。初め柳門に入、狂句を吟じ、今戯作者と成て粹書数編を著せり。一に弄月亭、また興阿弥と称号す。深く歌書を愛るが故に筆頭雲上にして、文章雅なり、興画も皇国の古事を専らとして、草紙ものの語中の人物を要とす。

『粹興奇人伝』にも略伝がある。

画像は李龍眠様式の第四蘇頻陀尊者に倣う。「物語」には次のように記す。

根が商人出の人だけに、なか／＼小才に立廻てうまい事をやらかす処から、善童子のやうでもなかなか人を喰つた太い羅漢だと諷したのです。大層肥て居て小楊子で歯糞を採るのや、鼻糞を丸めるのが又仲間になつて居ましたから、其画面も有難そうに糞玉を丸めて居ます。

## 〔二丁表〕

### 第三洒落発選者

洒落発選者は滑稽駝茶連興を説て、一切衆生を済度し、凡夫の腸をゑぐり、頤を解き、本相の悪意を隠し、許多の破羅門組を手下に遣ひ、瘤陀羅經を始め種々の隠面興を弘め給へども、敢て選者の所為業と知る者稀なり。又黄金仏の光りを尊み、二十五品に分て是を秘蔵し、専諸人愛敬の形容を現じ給ふ。

然りと雖、御父王の血脈を継て逆上の悩みあり。此故に興画独尊連中最第一と誇らせ給ふ事、盤若心狂に是を説り。

洒落発選者は浮世絵師として名高い落合芳幾のことである。明治三十七年二月六日没、七十二歳。やはり東京日日新聞創始者の一人とされ、日報社の株式を五十株所有していた。『くまなき影』には次のような略伝を載せる。

両国米沢町に住し、当時浮世絵三傑の一個と称せらる。曾て筆才のみならず、頓智発明世才にたけ、殊に秀句頓作の達人にして、平常の軽口実に滑稽の長者たり。さはあれ志正賢にして、人に誘引、浮たる席に到る事あれども、興尽る頃を量りて、退きて家に帰り、他に一泊せし事なしといへり。

駄洒落で知られ、『三題楽話作者評判記』には「駄じやれの問丸」「先生はせんせい風にしやれてしやれのめす方がよろしきやうにぞんじ升」「しやれ先生」と記されている。梅素玄魚（六丁裏参照）の秘事を暴いた「瘤陀羅経」をはじめとする多くの悪摺に関わっていた。

画像は李龍眠様式の第十半託迦尊者に倣う。両手に炬柄を持つ代わりに、笹を持っている。無声山人「悪摺考」には次のように記されている。

芳幾は逆上症なる父の血統を継て、狂人染たる人物なれば、斑女のご事を取り頭に鉢巻手に扇を附けたる笹を持たせて狂人に見立、又性吝嗇にして金子を貯蓄するを楽みとし、常に貯へし金子を懷中せしかば、黄金をつみし腹巻を、めめたるさまに描き、江戸子の面汚しと罵倒せしものなり、

「物語」も次のようにいう。

狂人染た様子があつたので画面を物狂ひにして、鉢巻をさせ、扇をぶら下げた笹を手にさせ、腹の胴巻が蛙を呑んだ蛇の様にふくれて居るのは、シミツタレを利かしたものです。

## 〔二丁裏〕

### 第四愚頭那選者

愚頭那選者は羽扇道人より仙道の法術を授り、他の趣向を我物となせども、憚る事なく、隱画經の惡摺を作こと、毎度その事露頭におよべども、空々しやア／＼たり。他の選者の興画の評に預るときは、彼處に飛行して自他の絵の説法に暇を費やし、万事の行状、行拔路次を通るが如し。惡羅漢達衆議して、一度是を退治せんとせしかど、馬に念仏、牛に經、張合なしとて止まれりとぞ。

愚頭那選者は落葉舎染谷のことである。『くまなき影』には次のような略伝を載せる。

神田松田町に居を卜して、徳力屋とよべり。故に十九勝と号し、千社の納札に美を競ひ、八九勝、左長等と俱に一時其道に名あり。其性書画を好で、物にかゝはらず。或時近辺に出火ありて、知己はじめ小もの等、器財皆土藏に運べる中に、染谷悠然として驚かず、藏書を披げて友人に見せたりしは、市中の君子といはまくのみ

『鳴久者評判記』には「染谷座」として惡摺の家元の一人に数えられている。

画像は李龍眠様式の第十一囉怛羅尊者に倣う。

## 〔三丁表〕

### 第五仙頭盧選者

仙頭盧選者はすつてん天竺野面川の向ふ水を産湯とし、あつかま獅子が窟に御降誕ありしより、護甬峰の中に行ひ済し、横着無人の振舞なりしが、中興錫杖を鳴し、鉄鉢を携へて檀方の門に立、修行の功

徳殊勝なりしも、紙帳の内の妄想より、衣の縫目ほころびて、元の空阿弥陀如来と現じ、有縁無縁の差別なく、万事達者にこぢつけ給ひ、茶店精舎を建立なせども、世上再度の勸化にこりてや、帰依の檀家少くして、多銭を投つの寄進なしといへり。

仙頭盧選者は井双庵笑魯である。島田筑波は大笑坊銀馬とするが、同一人物である。野崎左文「仮名垣魯文」によれば土屋家や相馬家の為替御用達を業とし、博奕を好んで入獄したこともあり、それをからかった「獄屋政談叩き噺し」という魯文作の悪摺で悶着をおこしたという。また「物語」によれば、明治三十五・六年頃には浜町でふじ屋という待合をしていたという。『くまなき影』には次のような略伝を載せる。

俗称松塚幸右衛門と号し、列侯の用達なりしが、性放逸にして、地屋敷及び家財を失ひ、名跡殆たへなんと做すを、妻の賢、一子の孝、是が為に再度故を存ずる事を得たり。是に於て笑魯先非を悔、菩提所徳松寺に入て出家なし、遺言に任せ、三世を継、雜俳の点者たり。復画面に遊びても、古事に寄ずし、世話ものゝ趣向に手がら多し。

画像は李龍眠様式の第三迦諾迦跋釐墮闍尊者に倣う。

### 〔三丁裏〕

#### 第六頭部呂久選者

頭部呂久選者は飲酒戒色欲戒を破るがために、五體の通力を失ひ、飛行の術くちけて、両足自在ならず、祇園精舎に趣くにも、藜の杖二本にすがりて、稍にして歩み給ふ。説法の坐に列りて物語ども、呂律まはらず、是がために聴衆耳を傾け、聞苦きに悩めり。かゝれども猶酒色の二戒を禁ずること能は

ず、南品宿三隨城の飯盛夫人にうつゝをぬかし、見通しの海辺に水を見て笑ひ樂み、取巻の破羅門等によいゝわいゝとはやされ給ふとなん。

頭部呂久選者は田所町の鰻屋和田平の主人、田卜である。明治十四年七月十一日没、六十六歳（『恩』）。馬十連の人々を慕い、自ら員外の馬十と名乗ったため『恩』に略伝が載る。『くまなき影』には次のような略伝を載せる。

田所町に居を下す。故に田卜の名あり。商内処の鰻、宇内に冠たるよしは、今更云んも絳経たり。雜俳に遊びては吟造と号し、藤紫仙と云。又角力をこのみ一年廿日の興行には、妻子親族に大事ありとも、往て視ざる事なし。近頃風与南駅に御輿を居、大歌くゝと離るゝは、かねて天王の前号あるゆゑんならん。

『くまなき影』に描かれた肖像も手に猪口を持っているので、大酒家であつたこと、また品川のことも記されているので、品川の飯盛女に馴染んだ事もよく知られたことであつたのであらう。

画像は李龍眠様式の第十四跋那婆斯尊者に倣う。「物語」は次のように記す。

二本杖を持った羅漢様の足元へ、小さな河童がお神輿を持てうづくまつて居るのは、品川名物の禪祭り河童天王に准へたもので、品川で祭り上げられるといふ所を現したのでせう。

#### 〔四丁表〕

#### 第七女難選者

女難選者は南伝馬国大矢山中に住ひ、行状堅固にして、常に俳諧精舎に遊び、傍作無二如来の編述ありし八犬経を讀暗記、風流三昧の道士なりしが、茶店精舎の集會に、東市破羅門が仲立により、夜叉

陀羅女が色香に迷ひ、供養の揚物五両を費し、虚空無上に花を降らせ、是がためにほと／＼神通力を失はんとす。御妻山嫁夫人、選者が墮落の所為を怒り、額に薪の如き角を生じ、口より胸のほむらを吹かけ、形相あたかも鬼子母の如し。選者是に恐怖し、行ひを改め給ひしとなん。

女難選者は西田妙伝寿（伝助・董坡）のことである。日報社の株を五十株所有し、東京日日新聞創始者の一人であつた。『くまなき影』には次のような略伝を載せる。

俳号鼓汀。西多氏。正門の俳諧を好み、句作毎吟秀逸あり。幼稚にして記憶衆に勝れ、稗史小説を読事、一編暗記して忘るゝことなし。近頃花街の五休が蔵板なる狗子草の一輯、八大伝を題せし俳冊も、子が意匠に出し処にして、十七字のみ屈曲せる雲水野叟と等しからず。雅才風韻推て知るべし。

篠田鉦造編『明治百話』には董坡が『南総里見八大伝』を暗記していたことが記されている狗子草は文久三年刊『狗児草』のこと。『読本研究』第六輯下套（一九九二年）に上野洋三「狗児草」の翻刻が備わる。五休は淡島寒月『梵雲庵雜話』（書物展望社、一九三三年）所収「西鶴雜話」に「吉原の岡本五休と云ふ俳人」とみえる。また「物語」には次のように記す。

女難選者は俳号を鼓打といつて、千葉勝の妹を女房にして居た西田伝助です。この人が中橋せ組 仕事師花岩の妹と乙な仲になつて居たのを、女房が焼いたといふ悪摺ですが、徳利へ藤が生けてあるのは、岩頭の妹が藤よしといふ待合を出して居たからです。

画像は李龍眠様式の第八伐闍羅弗多羅尊者に倣う。

〔四丁裏〕



## 第八無垢蓮選者

無垢蓮選者は生れながらにして、頭に皮を冠り、半面を出すのみ。されども勢ひ破竹の如く、御母娑袈夫人地嶽に落給ふと聞、選者黄泉に尋ね行、了に隱道を授けて歸りたまふ。又鉄鉢の中に油をたぎらし、漁者川の鮮き魚を踊らすの法術を得しのみならず、高坐に三題経を説法なし、狂言綺語の法の舞に、讃仏上手の誉をとり、歌舞の菩薩の身振、声色、手妻、大師のかんから太鼓に坐を持遊芸、かぞふるに尽ずとなん。

無垢蓮選者は自らは「鮮ぶら」と称し、世間では「大名天ぶら」とも呼ばれていた座敷てんぶらで名高い出揚扇夫のことである。篠田鉦造編『明治百話』にはそのてんぶらを揚げる様子が記されている。『くまなき影』に次のような略伝を載せる。

性器用にして、俳諧は守邑抱儀に学び、狂言は鷺何某に随従し、其他清元一中ぶし三弦身振声色に至る迄時として做ずと云事なし、只うらむらくは其術にいたらねど、去年年より坐敷天ぶらといふ事を工夫なせしが、これのみ天の与ふる所か、其業術の術にいたりて官看まねぐに日をあらそへり。

ここである鷺何某は馬十連の一人であった徳川家御能狂言師鷺伝右衛門であろう。

画像は李龍眠様式の第七迦理迦尊者に倣う。「物語」には次のように記されている。

画面に豚がついて居るのは、湯屋の貼りビラの時扇夫を熊の伝三郎の膏藥ビラにして、丸の中へ豚をかき、文句に「豚の油ぶたの強悪日々ひまやけのくすぶり」とやらかして大当りだつたので、それを茲へ持込んだのでせう。御尊名の事は申すまでもございますまい。

右手に抱えているのがてんぷら鍋で、『粹興奇人伝』掲載の肖像にも同じ鍋が描かれている。

〔五丁表〕

第九吞陀羅選者

吞陀羅選者は酒好山機嫌城に住て、棒陀羅損者の狂化を受、登論経を学び、正覚の法を修し、猩々無口の画漢なり。酒吞如来と俱に酤德泉に分入、頭菩薩仙人に随ひ、三合九合の功を積て、了に酒店精舎の大酒となれり。常に偏屈の窟に竈り、酒池肉林を望みて樂みとす。御つかはしめの狸、御腰にまつわり、金玉を敷て選者を坐せしむると雖、選者此為に御身を悩ます事折々ありといへり。

吞陀羅選者は画工の林静である。『明治文雅姓名録』（清水信夫編輯出版、明治十二年十一月二十七日届）によれば本名を兵藤甚右衛門といい、浅草須賀町一番地に住んでいる。興画合に才筆を揮った。『くまなき影』には次のような略伝を載せる。

岡島林斎の門に入、日を追ふて上達し、今林甫とともに林家の羽翼と賞され、上手を以て他にゆづらず。されども性酒をたしめ、酔ては更に筆をとらず、往に吞、いこふにのみ、彼一斗に詩百篇たる李白がむかしにかはれりとぞ画像は李龍眠様式の第十三因掲陀尊者に倣う。「物語」は次のようにいう。

無口で偏屈で疝氣持の癖に、大酒吞で遊びが好きとは呆れたもんだとアケスケにあばいたもので、お使しめに狸公が居るのは、疝氣で八疊敷ほど大きいといふ事を御覧に入れたのでせう。

〔五丁裏〕

第十驕慢選者

驕慢選者は分身きんしんの法術ほうじゆつを修し、常は春富士聖天はるふじしやうてんと現じ、或時は野翫間音やかうかんおんと化身けしんし、凡俗ぼんぞくを眼下がんかに見て、  
無茶論むちやろんを説き、虚八百巻うそはつひやくわんの興文けいもんを作り、有頂天うてうてん夢中国ちゆうごくの檀家だんかを驚かし、世界せかいの遊樂王ゆうらくわうをおびやかし、  
布施賽物ふせさんぶつを受けども、更に感応利益かんのうりやくなしといへり。山やまに登りては木きに餅もちの生なるを求め、海うみに浮うかみては蝦えびで  
鯛たいを釣つらん事を計り給ふとなり。

驕慢選者は宇治紫玉という翫間で、春富士節の家元であつた。仮名垣魯文『今紀文花街花道』に細木香以との逸話を載  
せ、『くまなき影』には次のような略伝がある。

交来同郷の産たり。若年の頃、五世南北の門に入て、狂言作者となりしが、後此界を見破て、音曲の徒に入り、今山  
谷堀に居を卜て、巴月庵と号す。性種癖ありて、行状頗る奇なり。多能にして、風流一切人に対して答ざる事なし。  
半世の珍説、世以て知るところなり。

画像は李龍眠様式の第六跋陀羅尊者に倣う。懸守を懸けているのは『大江戸』（成光館出版部、大正二年）所収、有明楼お  
菊「山谷堀の昔」に記載されている、紫玉が見栄を張った次のような話に基づくものであろう。

堀には春藤紫玉と云ふ名物の翫間がゐりました。拙いながら春藤節の家元で蒔絵を仕ましたが、余程変り物で、お客  
に艶辞は言はず横柄な坊主でしたが、談が上手で、丸で馬琴の読本と云ふ口調でした、此紫玉が至つて母孝行で、生涯  
無妻で暮しましたが、座敷が有つて出る時は必ず鰻の井を母に喰せるのが極りでした。此紫玉が妙に見え坊で、ある  
夏お客に連られて品川の湊屋へ往つた事が有りましたが、お客は湊屋に紫玉が馴染の女郎が在のを知つて居て、紫玉

## 〔六丁表〕

## 第十一 坐羅吞選者

を困らせる積りで、皆が銀鎖の懸守の揃ひと言渡したのです。所が紫玉は至つて貧乏で懸守が無いので、小万の所から袂落しに遣ふ銀鎖を借て来て足りないだけは有合の打紐を繋ぎ合して、鎖の方を前にして懸守と見せ、何喰ぬ顔で品川へお客に連れられて内幕を同じ替間の閻魔の金八が知つてお客に内々咄したので、お客は女郎の居る前見得を張る所で、サア／＼皆肌脱だと一番に諸肌ぬぐと、取巻連中も肌を脱で見せましたが、紫玉は右の理ですから独り脱ずに居ました。御僧（紫玉の事を客は御僧と云つたのである）ナゼ肌を脱がないのだ。イヤ拙は矢張此方が宜しいと汗水に成つて居る紫玉を、敵娼が無理に勧めて到頭肌を脱がすと銀鎖は前ばかりで、後は打紐の小道具細工に皆が手を拍つて大笑ひで有つたさうですが、兎に角堀の名物でゝいました。（振仮名を省略した）

坐羅吞選者は本来巴蛇の化身にして、御幼名を酒顯童子と申奉る。常に精舎に在りては一徳りの外を過ぎずと雖、檀家寄進の般若湯を吞こと、長鯨の百川を吸ふに似たり。酩酊十分に至る時は、腎を張、肩を怒らし、御顔青面金剛の如し。画漢集会の坐に列り給ふ折は、善神の如く見ゆれども、興画国の外に遊行し給ひては、功名の選者達を芥の如くに罵り、自ら最第一の画漢なりと誇り、凡俗を感し給ふ。然りと雖、御姉夫人富貴自在天女に孝養深くまし／＼て、昼夜懈怠なく能仕へ給ふとなり。

坐羅吞選者は本屋竹馬のことである。『くまなき影』には次のような略伝を載せる。

其先武門に出て、曾父の代に商個に下れども、武意を忘れず、天神真陽流の祖磯何某の門に入、柔術の印可を得て、

柳燕齋と号し、平井篤三郎源広利と称す。性雜書を好みて、すこぶる剛記也。壯年といへども婦女におぼれず、唯酒を好みて、玉の盃そこぬけ上戸と呼べるれども、平常質素儉約を所為として、行状老輩に勝れり。

「物語」は次のように記す。

坐羅呑選者は大伝馬町瓢箪新道に居た竹馬といふ男です。元は御家人でしたが町家へ下り、木綿問屋の川喜多なぞへ這入り込んで居た矢張り一種の取巻でありました。内職に仲宿大店の若い者が抜け出し、遊びに行く時の支度宿をして居ました。こんな訳で体が楽で、金廻りのいゝ所から通人仲間の交際をして居ました。酒癖のよくないのに御馳走酒なら幾等でもやるといふのと、一人の姉さんと道でない事をして居たのをこゝであばいたのでございます。

画像は李龍眠様式の第九戌博伽尊者に倣う。

#### 〔六丁裏〕

#### 第十二沙婆鬼選者

沙婆鬼選者は異蘭陀国奸僻山に在て、常に邪善の床に坐し、惡羅漢達の所為を憎みて、唯我独尊と行ひすま。破羅門組に頼れては、一度俠客心を発し、偏袒右肩の片肌をぬげども、すこしく御心に反く時は、忽向ふ面となりて罵ること甚し。興画国の惡狐等、選者を化度なし、景品の七珍三宝を得まくほりせしに、選者神通力を以て是を悟り、本来無一物、お巻は見たり、品はくれないと断りたり。御面像の瘤陀羅經は前に翻訳して世界に流布せりと雖、今時板本稀にして知る者少きは最惜むべし。

沙婆鬼選者は書画の板下の妙手であつた梅素玄魚のことである。明治十三年二月七日没、六十四歳。その伝は仮名垣魯

文『梅素小伝』（『芳譚雜誌』二五号、明治十三年三月）に詳しい。『くまなき影』には次のような略伝を載せる。

姓氏略伝俱に畸人伝に委しければ云ず。性強記にして、上は執柄の沙汰、下は歌妓のちわ狂ひまで、問ふに応ぜずと云事なし。就中狩野の家譜、両祭礼の番組等を弁するに、実に書あつて読がごとし。芳名四方に聞えて、近くは花街の松位、遠くは越後の都々一家、皆拳て先生と称す。一時或樓の全盛、雷名に聞はれ、見ぬ恋にあこがれし一話あれど、事長ければ略す。

また『粹興奇人伝』にもやはりその略伝が載る。

「破羅門組に頼れては、一度俠客心を発し」とは、『粹興奇人伝』にいう「性活達強俠、およそ頼まるゝ事としいへば、親疎を論ぜず他人のかたうでとなれるより、朋友戲称して筆の善三郎といふ」というように江戸っ子気質であつたことをいう。また「瘤陀羅經」は「白石くどき」の仕返しに魯文が執筆した悪摺で、『鳴久者評判記』にも取り上げられているが、その内容は不明である。おそらく『くまなき影』にいう「一話」であろう。『粹興奇人伝』に「或一友と絶交せし折」というのはこの時の魯文との關係をいつたものであろう。

画像は李龍眠様式の第十五阿氏多尊者に倣う。竜が老人に化して宝珠を乞う本図を狐に代えている。「物語」は次のようにいう。

鮑貝や草鞋を持たせて、狐が化して居る図は絵合せの連中が、玄魚をごまかして景品を取ろうとした所、反て玄魚に見露された一件を絵組に表したもの

狐を描いたのは玄魚が黒船町住んでいたことと、遠祖が安房大神宮の祝忌部氏であつたことから『粹興奇人伝』に神主姿で描かれ、かつ黒船町に住んでいたことなどから、『三題楽話作者評判記』には「だれかと思つたら畸人伝で見かけた黒船稲荷の神主どのか」、「鳴久者評判記」の「盛衰くらべ」の項にも「くろふねいなり」「神主殿」とあることから、「黒船

稲荷」「神主殿」が玄魚のあだ名であったと思われる。そこで本文では稲荷のおつかわしめということで、「悪狐」という表現になったのであらう。

### 〔七丁表〕

#### 第十三陀梵羅選者

陀梵羅選者は興画国点運山に住て、常に惡界に飛行し、御口の中より木の葉天狗に形容の似たる憎れ鳥を咄出し、嘴をとがらして惡羅漢達を罵り、廣大なる螺貝をふきたて、羽扇をあげてあをる時は、破羅門組是が為に心意を揉、確執の思ひをなす。かゝる大惡羅漢といへども、行狀堅固にして、活計怠る事なく、二天竺の十露盤国にわたり、十六利勘第一と称せらる。

陀梵羅選者は柳下亭種員没後『白縫譚』を刊行した広岡屋幸助のことである。大正七年七月十四日没、九十一歳。日報社の株主名簿によれば五十株を所有し、創始者の一人であった。石井研堂『明治事物起源』増補版（春陽堂書店、昭和十一年）の「東京日日新聞」一項にその創始談を掲載する。また『毎日新聞の源流』に略伝がある。『くまなき影』には次のような略伝を載せる。

深川佐賀町に住し、地本錦絵の間丸を業とす。俗称広岡屋幸助といふ。興画連中の一才子にして、毎度趣向に高評あり。この人業をあげみて他事なきも、或年友人とともに梅見に至り、各等しく句作をなすに、暗に秀逸を吟ぜり。夫より風韻に心を止め、いく程なく雅情に通ぜりとぞ。

「物語」は次のようにいう。

陀梵羅選者は日本橋大阪町に居た銀座役人辻安次郎の手代で、広岡幸助といった人、鼻が滅法高いので天狗と綽名があつたところから、御当人いゝ氣に成つて羽扇と号して居ました。内股膏藥の駄法螺ばかり吹いては仲間を騒して喜んで居たといふ厄介者、後に色摺機械印刷英泉社の發起人となつたり日報社の會計になつたりした人です。此人が出て地獄変相の悪摺りは、武田交來のやつた悪摺りを見現したといふ図で有名なものでございます。

画像は李龍眠様式の第五諾距離羅尊者に倣う。

## 〔七丁裏〕

## 第十四晋倭都選者

晋倭都選者は無口国晋倭利城看帝王の太子なり。常に多弁ならずといへども、事に臨む時は御口より毒氣を吹、大団扇に衆生をあをりて、是を本来の面目とし給ふ。選者種々の神通ありて、指頭に花をふらし、三光のひかりを顕し、或は盤面に二歩を遣ひ、凡眼をくらませしに、千住大觀音の為に神通を破られ、閉口頓首し給ふとなり。選者その昔玉夫人の為に惑溺して、一度大千下界に墮落し給ひし事ありとなん。

晋倭都選者は明治期に戯作者となつた武田交來である。明治十五年十月二十二日没、六十四歳。興画合のほか、三題嚮でも活躍し、『粹典奇人伝』にその伝が備わる。『くまなき影』には次のような略伝を載せる。

原森田座の大茶屋たり。父は勘亭流の一派を究め、其傍に柳風の狂句を克して、珍分館高麗と云。交來父の業をついで勘亭流を学ぶ。後年業を転て傭書家となり、興画連の一個たり。画合をなすに趣向尤精妙にして衆の眼を驚しむ。



性团扇を作るに奈良の佳品も却て拙く、実にあをぎよしとや。賞して可ならん。

交來の父は本名を武田屋虎右衛門といい、芝居茶屋であつた。橋本素行『恩』（明治三十三年刊）所載の伝によれば、虎右衛門は馬十連の一人で、当時通者がある人々は、この武田屋に出入らざるを肩身がせまいとし、河原崎座の奥役も勤めていたので世間に名を知られていたという。また天保六年刊『俳風狂句百人集』に「高麗 唐獅子連 珍分館」としてその画像と柳句を収める。交來も勘亭流の名手であつた父の業を継いたので「看帝王の太子なり」と記されたのである。

画像は李龍眠様式の第一賓度囉跋羅墮闍尊者に倣う。「物語」は次のように記す。

手にした鉄鉢の中から火を吹上げて、其中に「心」を顔にしたお使しめが飛出して居るのは、毒口を叩く腹の中の悪玉を見せたもの、勝負事が好きで、ゴマ／＼した事などもあばいた訳です。あばた面のしんねりむつつりを「晋倭都」と崇め奉つたのでせう

#### 〔八丁表〕

#### 第十五迦利古須選者

迦利古須選者は放蕩国無闇陀如來の隨身にして、貧窮山貧相寺中寢釈迦堂に住ひ、幼名を筆顚童子、一名を興画仙人と申奉る。借錢の御為にはたられ、毎日道精舎に火を降し、御妻棒陀羅夫人、御子碗泊童子に腮を釣らし、其身は夜每北方に飛行し給ふ。故に、常ニ一朱飯錢の貯なく、法類に齋借して、一箇を凌げども、咽元過て暑を忘れ、返す事を要とせず、しやア／＼として蛙の面へ水の如し、親分沙婆鬼選者、此不行跡を怒り、店判を抜、画漢の列を除んとせり。

迦利古須選者はこの『惡縁起』の作者で、浅草馬道寝釈迦堂の地内いろは長屋に住んでいた戯作者の仮名垣魯文のことである。明治二十七年十一月八日没、六十六歳。『くまなき影』には次のような略伝を載せる。

筆頭の疾事、風来を欺き、狂文に走れる事、三馬が才も遅かるべし。著述の稗史愛翫を得ざるはなく、无草稿の引札、滑稽至らぬ限もなければ、虚名を一時に高うせり。唯として、一日花街にいたらねば、寢食を克せねど、あながち京伝が昔を忍べるにもあらず。思ふに此子、西村主が志を継で、花街漫録の後篇を輯ん腹稿あれば、夫等のゆゑならんかし。

自ら貧困に苦しんだことを記している。このほか『粹興奇人伝』に伝がある。

画像は李龍眠様式の第十二那伽犀那尊者に倣う。『鳴久者評判記』の「脚色の種本」の項に「しかし作者はれの舌だし小僧としつかりおさへた仕打はかんしんもちろろ文丈有人ぬしにさしていこんはなけれど」、「白石くどき」の項にも「舌出し小僧となにたかきくろうにんだけなみかぜなし」とあるので、この当時の魯文のあだ名が「舌出し小僧」であったことは明らかであろう。そのためこの画像も舌を出して描かれているのである。

# 〔八丁裏〕

## 第十六新羅婆袈選者

新羅婆袈選者は舞台山に新狂戯別伝を説法し給へば、歌舞の菩薩耳を傾け、許多の見仏凡眼を驚かせり。筆頭の妙智力、神通自在にして目前を變る事、釈迦八相を一ト目に見るが如し。業法の間には興画に來り、画漢の中に列れども、あせりて景品を得る事を要せず、唯披口説法を勤行として、惡羅漢達の

国<sup>こく</sup>惡<sup>あく</sup>意<sup>い</sup>に組<sup>くみ</sup>せず、近<sup>ちか</sup>く交<sup>まじ</sup>りて遠<sup>とう</sup>く退<sup>しりぞ</sup>き、劍<sup>けん</sup>呑<sup>のん</sup>経<sup>きやう</sup>は開<sup>ひら</sup>く事<sup>こと</sup>なき勤<sup>きん</sup>身<sup>しん</sup>堅<sup>けん</sup>固<sup>こ</sup>の大<sup>だい</sup>画<sup>くわ</sup>漢<sup>わかん</sup>なり。

十六画漢惡縁起畢

新羅婆袈選者は狂言作者の河竹其水（黙阿弥）のことである。興画合の外、三題嘶でも活躍し、『粹興奇人伝』にその伝が備わる。明治二十六年一月二十二日没、七十八歳。『くまなき影』には次のような略伝を載せる。

世に知る処の歌舞妓作者、浅草寺なる寢釈迦堂の境内に卜居して、常に書齋に閑居、要用の外他行せざれども、博く江湖上の流行をうがち、筆頭に出るところ、新規妙案毎度見物の眼を驚せり。行状堅固にして、能く門人を撫育し、積善陰徳を旨とす。思ふにこのひと、積惡白波を戯場に脚色で、紫姫かひそみに做ふか故歟。

このほか『粹興奇人伝』にも伝が備わる。

画像は李龍眠様式の第十六注茶半託迦尊者に倣う。「物語」は次のように記す。

菩提樹と見せた橋は市村座下の草の中に、かたばみやなにかが交つて居るのは、中村守田の二座を利かせたもの、磐石の上へがつしりと筆を持って結迦趺座したのは三座の作者を兼て居た所を見せたものでせう。黙阿弥は何でも知つて居て知らない振りをして居る。あれは白ばつくて居るのだといふのです

市村座に出勤していた黙阿弥が守田座へ「スケ」として出勤したのは文久元年二月から、中村座には慶応元年正月から出勤している。かたばみは市村座を示すが、何を以て中村座としたかは不明。

〔裏表紙〕

興画庵藏板印





参考図 2

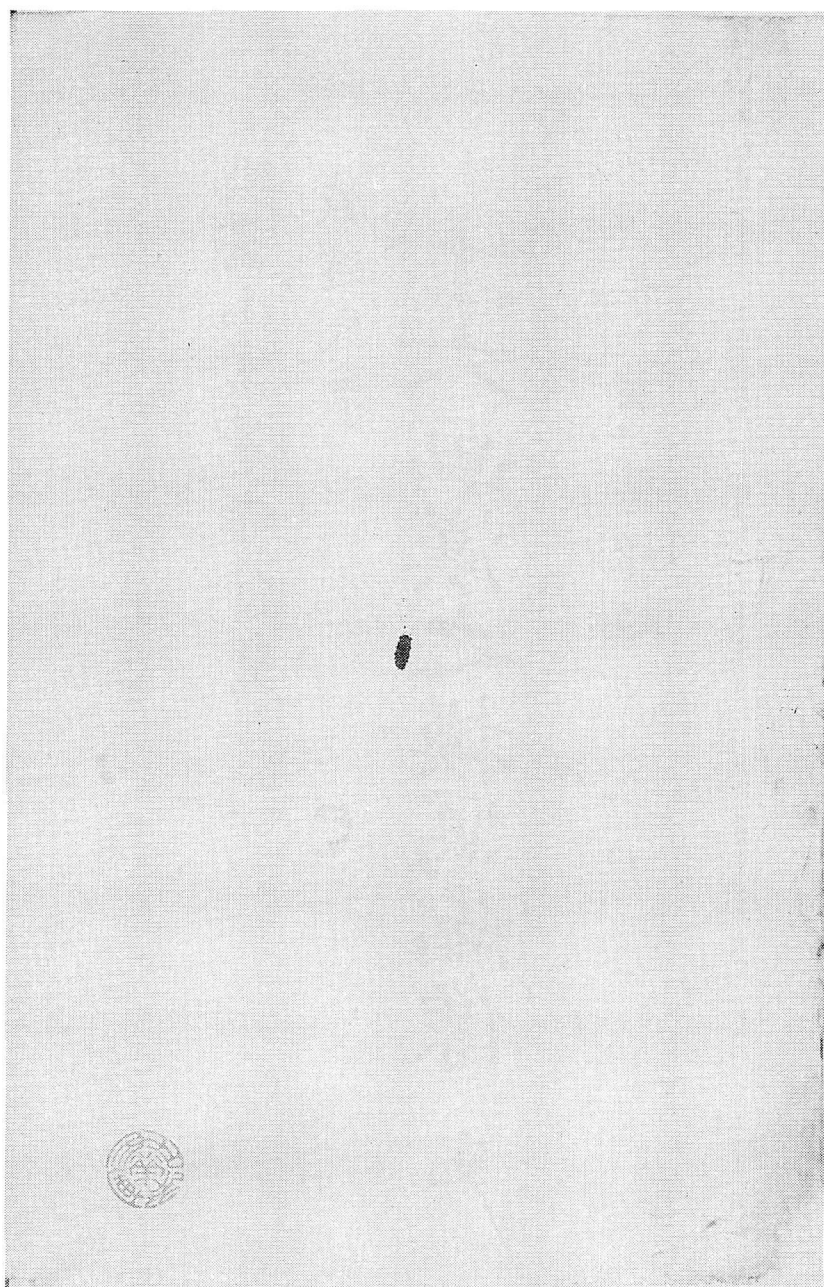
興畫山案景寺什寶

戲遊民筆

十六画漢之摸寫縮像  
完

並二惡緣起





第一破那阿迦選者



破那阿迦選者せんわの南なん籬し基き筭さん坐ざ狂言きやうげん常じやう小せう在ざい役者やくしや如來にょらい等とうの來迎らいいうを待まち本ほん體たいと號なづふ  
 聽衆ちやうしゆの諸物しよぶつ御經おきやうの役不足やくふそくをのふとさるち感かん然ぜん明めい主しゆの形相けいさうを現げん雲うん駕が一いつ馬ば道だうの精舍しやうしや小せう飛と玄げんあふとあり選者せんわ御鼻おんはな帝ていのふとありす都みやこく赤あかきを好このとたふ  
 御おん後ご免めんの弓ゆみのを阿あ迦じ雄ゆう童子どうしとより其その性しやう丹たん念ねんふまりとつとある自けう父ふと繼つぎり  
 隨ずいふも梵ぼん字じ數ず万まんと繕ふあの故こ上じやう根こん淨じやう書しよ筆へつ頭だう身み一いつ物ぶつと累かさね々々奉ほう水すいり



第二須菩提羅選者



須菩提羅選者すぼけらせん常とこ高たか軸じく二役にやく山さんの内のうちと出でるる奥おく画えの切き名なかゝるる神通しんつう自在じざいの惡あく羅ら  
 漢かんあり選せん若じやく御ご容よう肥ひ満まん外けい面めん善ぜん童どう子この如ごとく又また指さしどりつゝ鼻はなと宮みやち數かず多たの璽せ玉ぎよくをまろめ出で或ある  
 種あやく無む量りやうの脚きゃく細さい工こうとあゝあひ又また指さしどりつゝ鼻はなと宮みやち數かず多たの璽せ玉ぎよくをまろめ出で或ある  
 楊やう柳りゆうの枝えだををぎて口くち中ちゆうを探たづねり自みづからその臭くさ気きと加くわへる平へい産さんの快けい楽らくとあゝ  
 事こと普ふく衆しゆう生せいの知ちるるやあり

## 第三洒落葳選者



洒落葳選者ハ滑稽耽茶連貞を説て一切衆生を所度一凡夫の賜を乞ふ頤を解き  
 本相の惡意を隠し辭多の破羅門組を天下に下し彌陀羅經を始め種種の徳画貞弘免  
 縁をも放ち選者の所爲業と知る者稀あり又黄金佛の光りを奪ふ二十五年分て  
 是を秘藏し諸人愛敬の形容を現し又然りと魚脚父王の血脉を繕く遂に其  
 あり此故に眞画獨尊連中最尊一と誇らせめなり盤善心狂ま是を説り

第四愚頭那選者



愚頭那選者へ羽扇道人より仙道の法術を授け他の趣向を我物とせしむ輝き  
 あく隠画徑の意擲を促こと毎度その夕露顯ふおよぶも寧ろ老うく他乃  
 選者の奥画の許し預るまふ彼知は能行して自他の繪の說法不眠を費やし事ある  
 行状行接踏踏と通ふか如く惡羅漢違家穢しと一度是を退治せんとせり  
 馬ふ念佛牛ふ經張合あーとて止すゆゑとぞ

## 第五仙頭盧選者



仙頭盧選者せんづる らんとやてん天竺野面川てんぢやくのづらえの向ふ水むいを産湯うぶぬとあつゝ獅子ししが崖いそに脚こ降くだ誕た  
 あじより護崙峰ごろんぶの中うちに行おこひおこ横よこ着ちやく無む人じんの振舞おどりおど中うち奥おく錫しやく杖じやくと鳴なり鉄鉢てつぱつを  
 携かへか檀方だんぱうの門かどは立た降くだ初はつの切き徳とく珠しゆ勝しやうふふりりも紙帳しちやうの内うちの妄やう想しやうより衣ころもの縫ぬ目めをを  
 て元の空阿弥陀如来もとりのくあみだにょらいと撰せんト有縁うゑん無縁むゑんの差別さべつあり萬事ばんじ達者たつしやとこつこつけりけり多た茶店ちやてん精舎しやうしやを  
 疑うひひせせども世上せうじやう再度ふたたびの勅しやく化けよりて飯後はんごの檀寄だんぎよりて多た鉢ぱつを投なげなつつの寄進ぎしんありとて



第六頭部 呂久選者



頭部 呂久選者の飲酒戒色欲戒を破るがため五體の通力を失ひ邪行の御  
 るをけし西足自在なるも祇園精舎に趣くも藤の杖に牽ふすがうて稍なり歩み  
 祝法の坐お別りて物語ども呂律まわつて是かゝる小猿を耳を傾けしや若し  
 かくもも酒色の一戒を禁むると徒に南無三隨嫌の飯盛まふうはせぬ  
 見通しの海辺に水とて笑ひ樂み取巻の破羅門等中へいさぐとまされあふん

## 第七女難選者



女難選者にんなんせんしやは南傳馬國大矢山中なんでんばこくおおいやさんちゆうに住すまひ行狀堅固かうこつけんこにて常とこに俳諧精舍はいかいしやうさに遊あそび傍かたわらに無二如來むににらうの偏迹へんせき  
 あり八や大徑おほおほと讀よ暗紀風流あんきふうりゆう三味さんみの道みちより茶唐精舍ちやとうしやうさの集會しゆかいよりさう東市とういち被羅門へいらもんに付つ立たふより  
 夜叉陀羅女やしゃたらにょを色香いろかうあ迷まよひ世艱よがの揚物やうぶつ五兩ごらうを費つひやし虚空こくう無上むじやうに花はなを降ふらせ是これはかゝるあふ  
 ゐい神通力しんつうりきを失しつゝ御妻おつま山嫁さんよめま入選者いりせんしやが墮落だらくの所為ゆゑと怒いふ類るいは新しんのめきを角つうと  
 生あうくく早はやく胸むねのむねと破やく形相かたちあひああ鬼子母きそぼの如ごとく選者せんしや是これは忍怖にんふし行なひて跋はくはひまゐ

# 第八無垢蓮選者



無垢蓮選者ハ生きたるがはて頭ハ皮と冠り半面を出どろのきれも勢ひ破竹乃如く  
 御母夢賀主人地獄に落りて聞選者黄泉に尋ねたり了小陰道と抜けし降り  
 たり又鉄餅の中小油をたぎりし漢者川の鮮き魚を頭らまの法術を傳へしとあるに  
 高坐より三題經を説法なり狂云綺語の法の舞小機伴上子の養とより欲其孫の  
 菩薩の身振るる色々要大師のかんく右轂は坐と持遊歴かどつ小辱はとあり

第九 吞陀羅選者



吞陀羅選者へ酒好山機嫌城に住く棒陀羅換者の任化を要至論経を著し正覺  
 の法を授け輝く舌の画漢あり酒吞如衆と俱ふ酬徳衆は分入頭菩薩仙人より  
 随ひ三合九合の切を積りて了酒店精舍の大酒とあり常小偏属の出属不竜り  
 酒池肉林を至るく樂とて且御つるゝ力程御腰ふす門より金玉を散らす  
 選者を坐せしむと出選者此為小御身を悩ますと折ありとあり



# 第十驕慢選者



驕慢選者ハ分身の法術を修シ常ハ春富士聖天ニ現シ威時の野鬚阿青  
 と化身一凡俗を眼ヲふんシ無茶論を統慮八百卷の奥文を作り有頂天竺  
 夢中國の極東を發シ世間の遊樂王をおむりし布施寶物を受レども  
 更ニ感應利益はとあり山は登りてい木は餅の生を求め海は浮きてい船を願  
 物らん子を計りありありあり

## 第十一 坐羅吞選者



坐羅吞選者、本來巴蛇の化身して、御幼名と酒顛童子と中奉る常々精舎に在りて、一徳利の  
 外を過さばと、虫擅家寄進の蟹名湯と吞と長鯨の百川を吸ふと似る、酩酊十分お至る阿鼻と  
 張角と怨に酒顔青面金剛のや、西漢集會の也ふ列りあふ務は善神の如く見ゆ、古の  
 西國の外に遊初、あひと切名の選者達を救の如く罵り自ら最貧一の西漢ありと誇り、尼姑を  
 怒め、あふ然りと出御婦人富貴自在天女を考、艱く泊りて、晝夜懈怠なく能はあふあり

第十二沙婆鬼選者



沙婆鬼選者ハ異蒲陀國奸僻山に在り常に邪惡の跡を坐し夏羅漢達之所爲と懼く唯我獨  
 と行ひ勝破羅門組に頼むて一度使者と爲し偏細を肩の行肌とぬきてすくしく御心より  
 怒向ふ面とありて罵ると慍奥画國の惡執等選者と化度は景岳の七跡と云と傳さくありせ  
 ると神通力と云く果と悟り本来無物も悉くなり品つてと斷りく御面像の癩院經  
 の事と觀經く世界に流布せりと云今時板中務ありく知る者みきとい最勝むべし

## 第十三 陀梵羅選者



陀梵羅選者ハ奥國也運山に住ク常ニ惡界ニ飛行一御日の中より木の葉天物を  
 形容の似る憎惡鳥を咄わ一着をさうし一惡羅漢邊を罵り廣大なる螺貝を  
 焼きたる羽扇をあぐ一つを以て破座門祖是がふ心意を揉確執の名ひをを  
 かる大惡羅漢といふも折々望園より活計怠る復なく二天竺の十露盤  
 関ふくく十六利勤覺と移せしむ





第十五迦利古須選者



迦利古須選者ハ放蕩國無衛陀和蘇の隨身アリク禽鷄ハ食相寺中保親如昔アリ任以  
 幼名ハ筆頼童子一名ハ眞画仙人と申奉る傍佛の御方ふそつりれ毎目道精舎小火を降  
 御妻捧陀陀中人御子碗泊童子お惚と稱じ其方ハ夜女北方小飛都ハハ放夢一朱  
 飯饌の貯アリ法類ハ蘇儲て一箇と懐げとも咽えりて老を忘じ返ハハを要とせとせ  
 ちりくじて蛙の面水のや親方ハ婆婆鬼選者此不初迄と怒り唐判と振画漢の刻は漆金也

第十六新羅婆伽選者



新羅婆伽選者ハ舞臺山ノ新狂戯別傳を説法ニハ新羅の善薩耳を傾け舞臺の  
見佛兒眼を驚せり筆頭妙智カ神通自在アリ目下と愛方更新迎八相を  
下目不見カヤ業法の間々無画國々来リ画漢の中列下カあせり景品を傾け  
と雲せむ唯披口説法と勤行より惡羅漢連の惡言不組せむ近くより遠く遠き  
劍香經ハ聞く度あり勤身賢國の大画漢あり

十六画漢惡縁起畢

